

## 機関誌発行100号を祝す

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-03-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 池谷, 仙之 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.14945/00024762">https://doi.org/10.14945/00024762</a>

## 機関誌発行100号を祝す

静岡県地学会 前会長 池谷 仙之

地学の研究と地学教育の振興・普及を目指して、1964年にたった13人の会員でスタートしたと云う静岡県地学会は、その後、常に200人余の会員によって支えられ、機関誌「静岡地学」を定期刊行してきました。発足から45年を経て、この度、目出たく100号を発行する運びとなりました。何事によらず、半世紀にもわたってコンスタントに100回継続すると云うことは並大抵のことではありません。これまでの会員諸氏の絶大なるご支援に感謝し、運営に携わってきた多くの方々の熱意に敬意を表します。

私が静岡大学に赴任したのは1970年の春でした。当時は「郷土の自然をみんなで調べよう」と云ういわゆる団体研究が盛んな頃で、どこの県にも地学会が設立され、県単位での地学教育が華々しく展開されていました。静岡県地学会もこのような風潮の中で発足したと想像されますが、できた経緯はそれ以前から活発に活動していた地学教室の同好会が基になったようです。静大に赴任した早々、私に命じられた最初の仕事が静岡地学の編集でした。当時は教官も卒業生も学生たちも大変熱心で、原稿も積極的に投稿して下さり、総会・年会も全国的な学会なみの盛況で、当時の学生は全員が参加していたように記憶しております。

時代と共に社会も大学も変化していくことは当たり前ですが、地学会を取り巻く環境も大きく変わりました。最近では、大学のスタッフもグローバル化の名の下に県下のローカルなフィールドに興味を示さない人が増え、一地方の小さな学会などを相手にしなくなりました。会員の多くも、他の楽しいレジャーに取り込まれてしまったのか、会の催しに以前のように参加しなくなってしまうようになりました。総会や年会に学生たちの姿はなく、一握りの熱心な昔からの常連しか参加しない状況が続いています。この現象は静岡県に限ったことではなく、全国的なことであり、今では二三の県がかりうじて生き残っているだけで、ほとんどの県地学会は活動を停止してしまったようです。このような中で、頑張っている静岡県地学会に拍手したい。そしてかつての元気さを取り戻し、末永く継続することを願っています。

自然史の研究はローカルな現象の地道な観察にはじまり、大きな発見へと繋がっていきます。自然史を理解することは、身の回りの豊かで神秘に満ちた自然の「ふるまい」を五感（視・聴・嗅・味・触）で感じ取ることでもあります。多くの方々にもっともっと参加して頂き、地球の神秘を解く醍醐味を味わって頂きたいと思います。近年、「自然との共生」が益々重要な課題となってきました。自然史科学の原点は広い視野をもった地学の中にあります。身近な地学現象の解明に取り組みましょう。